

話童ウトハーイ

店理料い多の文注

著 治賢澤宮

頓装書挿輝武挖菊



ハイヴト重品

注文の多い料理店

宮澤賢治著

菊池武雄挿畫装幀



大正十三年十一月十日印刷
大正十三年十二月一日發行

定價金壹圓六拾錢

郵稅六錢



著作者 宮澤賢治

盛岡市厨川館坂五六

發行者 近森善一

東京市外巢鴨町宮下一七九四

印刷者 吉田春藏

發賣元

盛岡市厨川館坂五六
東京巢鴨町宮下一七九四

杜陵出版部
振替仙臺五六九一番

東京光原社
振替東京六九五〇五番

序

わたしたちは、氷砂糖こほりざとうをほしくらゐるもたないでも、きれいにすきとほつた風かぜをたべ、桃ももいろのうつくしい朝あさの日光にっこうをのむことができます。

またわたくしは、はたけや森もりの中で、ひごいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびらうどや羅紗らしゃや、寶石ほうせきいりのきものに、かはつてゐるのをたびたび見みました。

わたくしは、さういふきれいなたべものやきものをすきです。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林はやしや野のはらや鐵道線路てつだうせんろやらで、虹にぢや月つきあかりからもらつてきたのです。

ほんたうに、かしはばやしの青あおい夕方ゆふがたを、ひとりで通とほりかかつたり、十一月じゅういちがつの山やまの風かぜのなかに、ふるえながら立たつたりしますと、もうどうしてもこんな氣き

がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書かいたまでです

ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでせうし、ただそれつきりのところもあるでせうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでせうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。

けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾いくきれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。

大正十二年十二月二十日

宮澤 賢治

目次

どんぐりと山猫	(一九二一・九・一九)	一
狼森と笹森、盗森	(一九二一・一一・……)	三三
注文の多い料理店	(一九二一・一一・一〇)	四三
烏の北斗七星	(一九二一・一二・二一)	六五
水仙月の四日	(一九二二・一・一九)	八三
山男の四月	(一九二二・四・七)	一〇三
かじはばやしの夜	(一九二一・八・二九)	一二三
月夜のでんしんばしら	(一九二一・九・一四)	一五五
鹿踊のはじまり	(一九二一・一九・一五)	一七一

どんぐりと山猫

おかしなはがきが、ある土曜日どようびの夕ゆふがた、一郎いちろうのうちにきました。

かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほど、けつこです。

あした、めんどなさいばんしますから、おいで

んなさい。とびどぐもたないでくなさい。

山ねこ 拜

こんなのです。字じはまるでへたで、墨すゐもがさがさして指ゆびにつくくらゐでした。

けれども一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそつと學校のかばんにしまつて、うちうちとんだりはねたりしました。

ね床にもぐつてからも、山猫のやあとした顔や、そのめんだうだといふ裁判のけしきなどを考へて、おそくまでねむりませんでした。

けれども、一郎が眼をさましたときは、もうすっかり明るくなつてゐましたおもてにでてみると、まはりの山は、みんなたつたいまできたばかりのやうにうるうるもりあがつて、まつ青なそらのしたにならんでゐました。一郎はいそいでごはんをたべて、ひとり谷川に沿つたこみちを、かみの方へのぼつて行きました。

すきとほつた風がざあつと吹くと、栗の木はばらばらと實をおとしました。

一郎は栗の木をみあげて、

「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかつたかい。」とききました。栗の木はちよつとしづかになつて、

「やまねこなら、けさはやく、馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ。」と答へました。

「東ならぼくのいく方だねえ、おかしいな、とにかくもつといつてみやう。栗の木ありがたう。」

栗の木はだまつてまた實をばらばらとおとしました。

一郎がすこし行きますと、そこはもう笛ふきの瀧でした。笛ふきの瀧といふのは、まつ白な岩の崖のなかほどに、小さな穴があいてゐて、そこから水が笛のやうに鳴つて飛び出し、すぐ瀧になつて、ごうごう谷におちてゐるのをいふのでした。

一郎は瀧に向いて叫びました。

「おいおい、笛ふき、やまねこがここを通らなかつたかい。」瀧がびーびー答へました。

「やまねこは、さつき、馬車で西の方へ飛んで行きましたよ。」

「おかしいな、西ならばくのうちの方だ。けれども、まあも少し行つてみやうふえふき、ありがたう。」

瀧はまたもとのやうに笛を吹きつゞけました。

一郎がたまたますこし行きますと、一本のぶなの木のしたに、たくさんの白いきのこが、どつてこどつてこどつてこと、變な樂隊をやつてゐました。

一郎はからだをかがめて、

「おい、きのこ、やまねこが、こゝを通らなかつたかい。」

とききました。するときは

「やまねこなら、けさはやく、馬車はしやで南みなみの方ほうへ飛とんで行いきましたよ。」とこたへました。一郎いちろうは首くびをひねりました。

「みなみならあつちの山やまのなかだ。おかしいな。まあもすこし行いつてみやう。さのこ、ありがたう。」

きのこはみんないそがしさうに、どつてこどつてこと、あのへんな樂隊がくたいをつづけました。

一郎いちろうはまたすこし行いきました。すると一本いっぴんのくるみの木の梢こやえを、栗鼠りすがびよんととんでゐました。一郎いちろうはすぐ手てまねぎしてそれをとめて、

「おい、りす、やまねこがここを通とほらなかつたかい。」とたづねました。するとりすは、木きの上うへから、額ひたいに手てをかざして、一郎いちろうを見みながらこたへました。

「やまねこなら、けさまだくらいうちに馬車ばしやでみなみの方はへ飛んで行きましたよ。」

「みなみへ行つたなんて、二とこでそんなことを言ふのはおかしいなあ。けれどもまあもすこし行つてみやう。りす、ありがたう。」りすはもう居ませんでした。たゞくるみのいちばん上の枝えだがゆれ、となりのぶなの葉はがちらつとひかつただけでした。

一郎いちろうがすこし行きましたたら、谷川たにがはにそつたみちは、もう細ほそくなつて消えてしまひました。そして谷川たにがはの南みなみの、まつ黒くろな樅かやの木の森もりの方はうへ、あたらしいちいさなみちがついてゐました。一郎いちろうはそのみちをのぼつて行きました。樅かやの枝えだはまつくろに重かさなりあつて、青あおぞらは一ひときれも見えず、みちは大たいへん急きうな坂さかになりました。一郎いちろうが顔かほをまつかにして、汗あせをぼとぼとおとしながら、その坂さかをの

ぼりますと、にはかにぼつと明るくなつて、眼がちくつとしました。そこはうつくしい黄金いろの草地で、草は風にざわざわ鳴り、まはりは立派なオリウいろのかやの木のもりでかこまれてありました。

その草地のまん中に、せいの低いおかしな形の男が、膝を曲げて手に革鞭をもつて、だまつてこつちをみてゐたのです。

一郎はだんだんそばへ行つて、びつくりして立ちどまつてしまひました。その男は、片眼で、見えない方の眼は、白くびくびくうごき、上着のやうな半天のやうなへんなものを着て、だいいち足が、ひどくまがつて山羊のやう、ことにそのあしききときたら、ごはんをもるへらのかたちだつたのです。一郎は氣味が悪かつたのですが、なるべく落ちついてたづねました。

「あなたは山猫をしりませんか。」

するとその男は、横眼で一郎の顔を見て、口をまけてにやつとわらつて言ひました。

「山ねござまはいますぐに、こゝに戻つてお出やるよ。おまへは一郎さんだな。」

一郎はぎよつとして、一あしうしろにさがつて、

「え、ぼく一郎です。けれども、どうしてそれを知つてますか。」と言ひましたするとその奇體な男はいよいよにやにやしてしまひました。

「そんだったら、はがき見だべ。」

「見ました。それで來たんです。」

「あのぶんしやうは、ずるぶん下手だべ。」と男は下をむいてかなしさうに言ひました。一郎はきのどくになつて、

「さあ、なかなか、ぶんしやうがうまいやうでしたよ。」

と言ひますと、男はよろこんで、息をはあはあして、耳のあたりまでまつ赤になり、きものゝえりをひろげて、風をからだに入れながら、

「あの字もなかなかうまいか。」とききました。一郎は、おもはず笑ひだしながら、へんじしました。

「うまいですね。五年生だつてあのくらゐには書けないでせう。」

すると男は、急にまたいやな顔をしました。

「五年生つていふのは、尋常五年生だべ。」その聲が、あんまり力なくあはれに聞えましたので、一郎はあわてゝ言ひました。

「いゝえ、大學校の五年生ですよ。」

すると、男はまたよろこんで、まるで顔ぢう口のやうにして、にたにたにた

にた笑つて叫びました。

「あのはがきはわしが書いたのだよ。」一郎はおかしいのをこらえて、

「せんたいあなたはなにですか。」とたづねますと、男は急にまじめになつて、

「わしは山ねこさまの馬車別當だよ。」と言ひました。

そのとき、風がどうと吹いてきて、草はいちめん波だち、別當は、急にていねいなおぢぎをしました。

一郎はおかしいとおもつて、ふりかへつて見ますと、そこに山猫が、黄いろな陣羽織のやうなものを着て、緑いろの眼をまん圓にして立つてゐました。やつぱり山猫の耳は、立つて尖つてゐるなど、一郎がおとひましたら、山ねこはびよこつとおぢぎをしました。一郎もていねいに挨拶しました。

「いや、こんにちは、きのふははがきをありがたう。」

山猫はひげをびんとひつばつて、腹をつき出して言ひました。

「こんにちは、よくいらつしやいました。じつはおとゝひから、めんどうなあらそひがおこつて、ちよつと裁判にこまりましたので、あなたのお考へを、うかがひたいとおもひましたのです。まあ、ゆつくり、おやすみください。ちよつと、どんぐりどもがまわりませう。どうもまい年、この裁判でくるしみます。」山ねこは、ふところから、巻煙草の箱を出して、じぶんが一本くわい、

「いかゞですか。」と一郎に出しました。一郎はびつくりして、

「いゝえ。」と言ひましたら、山ねこはおほやうにわらつて、

「ふゝん、まだお若いから、」と言ひながら、マッチをしゆつと擦つて、わざと顔をしかめて、青いけむりをふうと吐きました。山ねこの馬車別當は、氣を付けの姿勢で、しやんと立つてゐましたが、いかにも、たばこのほしいのをむり